

学級集団を形成する要因についての検討<sup>1)</sup>

## －学級満足群と友達関係において－

A study on the factors organizing classes : Effects of friendship in the classes on individual's satisfaction to classes

吉川栄子・高橋 宗

YOSHIKAWA Eiko & TAKAHASHI Shu

(聖泉大学人間学部人間心理学科)

## 要 約

本研究では、中学校の生活に慣れた2年生が学級の中でどのような集団状況を示すのか、また、学級に満足するための要因は何かといった点について、検討することを目的とした。中学2年生を対象に調査を実施し、学級生活満足群、侵害行為認知群、非承認群、学級生活不満足群の比較をおこなった。その結果、中学生が学級の中で満足群や不満足群に属する要因として、学級の友達同士のかかわり方によってどちらの群に属するかといった状況の分かれ目となっていること、また、クラスの仲間から友達として、どのようなかかわり方をしてもらうかによって、学級が満足できる場所（居場所）として認知することができるかどうかの要因となることが明らかにされた。

**Key words** : 学級満足群, かかわりのスキル, 自尊感情, 学級集団, 友達関係

## はじめに

文部科学省は『生徒指導上の諸問題の現状について（平成18年9月）』のなかで、不登校になった直接のきっかけを「学校生活に起因」「家庭生活に起因」「本人の問題に起因」の3つの内容で区分して検討している。それによると中学校では、①「学校生活に起因」②「本人の問題に起因」③「家庭生活に起因」の順になることを報告している。また、不登校経験が20歳になっ

1) 本研究の一部は、日本教育心理学会第48回大会（平成18年9月16日～18日開催、於岡山コンベンションセンター）において報告をおこなった。

たとき、不登校に陥った直接のきっかけを調査した文部科学省の『不登校に関する調査—不登校生徒追跡調査報告書（平成5年）』では、不登校になる原因として、「教師との関係をめぐる問題」をあげているものが20.8%と高い数値を示している。

不登校に陥った直接のきっかけについて教師は、「本人の問題」「家庭生活」といった原因でとらえているのに対して、不登校経験者は「友人関係をめぐる問題」「学業の不振」「教師との関係をめぐる問題」ととらえているのが特徴である。

このように、不登校経験者と教師では、とらえ方に違いはある。しかし、不登校の原因として「学校生活に起因」することが直接のきっかけになりうる要因であると考えるのは、共通した認識といえる。

このようなことから、不登校は特定の子どもたちに特定の問題があって起こるのではない。不登校は、学校、家庭、地域社会など、さまざまな要因が複雑に絡み合っていて起きていると考えられることから、どの子どもにも起こりうることとしてとらえられており、不登校児童生徒への理解を深めていく必要があることが言われるようになった。このような流れの中で、小野寺・河村（1999）は、自己開示の意義に着目し、中学生の学級内における学級満足度と自己開示度の調査をし、学級生活満足群の自己開示度が高く、学級生活不満足群の自己開示度が低いことを明らかにしている。特に、中学生が学級内において自己開示をおこなうことは学級生活満足度に影響を与えているといった相互作用があることを明らかにしている。それに基づいて、教師の集団に対する対応の状況を、児童生徒の学校生活満足度尺度（河村・田上、1997）を見出し、その結果をプロット分布図に位置づけ、個々の児童と学級集団、及び教師との関係を分析している。それによって、教師が集団への的確な判断とよりよい対応ができることから、不登校児童生徒への対策にもつながることを報告している。このような尺度の活用（向井・河村、1999）は、児童生徒が楽しい学校生活を送るためにどのような手立てをしたらよいかという具体的な対応を検討するといった実践研究として教育現場に活かされる

ことを示している。

一方、河村（1999）は、不登校やいじめ、学級崩壊などの問題が学校教育現場で深刻化している背景には、児童・生徒の人間関係形成・集団活動への参加の意欲の低下と、対人関係づくりや集団活動をするためのソーシャル・スキルの学習不足が考えられると述べている。そこで、児童・生徒が学級内で良好な友人関係を形成したり、学級集団に適応するためには、どのようなソーシャル・スキルが必要とされるのかについて調査し、尺度を作成した。それによって、教育現場で深刻化している子ども集団の問題の背景にある要因として、児童・生徒の人間関係の形成がうまくできないとか、集団活動への参加方法や意欲の低下といった対人関係や集団活動をするために、もっとも必要と考えられるソーシャル・スキルの学習が不足していることが考えられるようになった。また、河村（1999）は中学生を対象にした援助ニーズの段階を理解するための尺度を作成し、登校しぶりや学級内での孤立など、問題を持ち始めたり、問題をもつ可能性の大きい一部の生徒への援助を必要とする生徒を発見することができることを指摘している。教師が生徒の援助ニーズの段階を把握できれば、次に中学校生活のどの領域から援助すればよいのかといったことが検討できるとしている。

これらの研究が示すことは、学校生活においては、生徒たちの人間関係のありようが、楽しい学級生活を送れるための手だてを見出すものであり、生徒一人ひとりにとって重要な意味を持っている。そこで、本研究では、中学2年生における学級集団の状況がどのような状況にあるかを把握した。その上で、学級集団に対する満足度と友達関係がどのような関係にあるかを検討した。また、学級生活において、どのような意識感情をもっているかを知るために、自尊感情を測定した。その感情が友達同士の良好な関係を築ける者と、そうでない者との間に違いがみられるかどうかについて分析することにより、中学生の集団形成に関する要因について検討することを目的としておこなった。

## 方 法

**被調査者** 滋賀県内のR中学校2年生138名（男子72名，女子66名）を調査対象として7月と10月の2回実施した。

**調査時期** 調査は，2005年7月と10月の2回実施された。

**質問紙** 調査に用いた質問紙は，以下の尺度によって構成された。

1) 学級集団の状況を把握するために、河村（1999）が作成した「学校生活満足度尺度（中学生用）（河村・田上，1997）（以後、Q-Uテスト）」を用いた。この尺度には、やる気のあるクラスをつくるためのアンケート項目と、いごちのよいクラスにするためのアンケート項目が含まれている。

やる気のあるクラスをつくるためのアンケート項目では、生徒が学校を心の居場所として受け入れ、イキイキと活動することができると感じていることを測定するものである。この項目では、友達関係、学習意欲、学級の雰囲気、教師との関係、進路意識の5つの領域について測定される。

いごちのよいクラスにするためのアンケート項目では、自分が集団の中に受け入れられていることを測定する。特に、その集団の中でイキイキとした人間関係の活動をするためには、一人ひとりの考えや感情がクラスの仲間によって受け入れられ、お互いに価値があると認めあうことが必要な条件である。このような感情が、学級集団において受け入れられることにより、個々の生徒が学校生活そのものを充実させる条件となっており、測定されたデータはプロット図として示される。それらは、学校生活満足群、非承認群、侵害行為認知群、学校生活不満群の4群に分けられ分析される。

2) 生徒の学級におけるソーシャル・スキルについては、河村（2001）により開発された「生徒が学級生活で必要とされるソーシャル・スキル尺度（中学生用スキル尺度）」（以後、ソーシャル・スキルテスト）を用いた。

3) 友達関係を形成する要因について検討するために、自尊感情尺度（山本・松井・山成，1982）と、情動的共感性尺度（加藤・高木，1980）の調査項目を用いた。

自尊感情とは、「人が自分自身についてどのように感じるのか」という感

じ方のことであり、自己の能力や価値についての評価的な感情や感覚のことである。しかし、自尊感情のとらえ方は各研究者によって異なっている。例えば、ローゼンバーグ（1965）は、他者との比較により生じる優越感や劣等感ではなく、自分自身が自己への尊重や価値を評価する程度のことを自尊感情と考えている。したがって、自分自身が「これでよい」と感じる程度が自尊感情の高さを示すと考えられている。したがって、自尊感情が低いということは、自己拒否、自己不満足、自己軽蔑を表しており、自己に対する尊敬を欠くことにつながることを示す。このローゼンバーグ（1965）が作成した尺度を山本ら（1982）が翻訳し尺度化したものを調査項目として利用した。

情動的共感性尺度（加藤・高木，1980）については、他者の情動や感情に対する共感性を測定するための尺度である。この他者の心情を感じとる能力を共感性と考え、共感性の程度が、その人の対人的態度（援助行動や思いやりなど）に影響する。また、この尺度には、「感情的暖かさ」（10項目）、「感情的冷淡さ」（10項目）、「感情的被影響性」（5項目）の3つの下位次元からも測定できるようになっている。

**手続** 学級集団の状況を把握するために、河村が作成したQ-Uテスト、ソーシャル・スキルテストを実施した。また、集団の形成要因を把握するために情動的共感性尺度（加藤・高木,1980）、自尊感情尺度（山本他,1982）なども同時に実施した。調査は被験者の所属する学校の教務主任に調査を依頼した。依頼後3週間ほどで調査を各学級の担任が実施した。実施にあたっての注意や、本調査が学校の成績や個人の問題には関係がないことを、調査用紙に明記し、生徒に読ませた。担任には、実施の手順（注意事項を含む）を別の用紙で渡し、調査実施前に熟読してもらうことを依頼した。各調査は20分程度で実施した。生徒たちの記入が終わるのを確かめて、調査用紙を担任が回収した。この手順で、3つの調査用紙を配り、実施した。全ての調査時間は約1時間以内で、終了後、郵送にて回収した。2005年7月と10月の2回実施された。

各群のグルーピング 表1に示すようにグルーピングをおこなった。7月に満足群におり、10月にも満足群に属するグループを常時満足群（以下、AA群）と名づけた。同様に、7月・10月とも侵害行為認知群に属するグループを常時侵害行為認知群（以下、BB群）、非承認群に属するグループを常時非承認群（以下、CC群）、不満足群に属するグループを常時不満足群（以下、DD群）と名づけた。

表1. グルーピングによるグループの名前

グルーピング	グループ名
7月・10月とも満足群	常時満足群（AA群）
7月・10月とも侵害行為認知群	常時侵害行為認知群（BB群）
7月・10月とも非承認群	常時非承認群（CC群）
7月・10月とも不満足群	常時不満足群（DD群）

そこで、本研究では、各実施月における4群（満足群、侵害行為認知群、非承認群、不満足群）と、上記の4群を用いて比較検討をした。

## 結 果

回収したQ-Uテストの「いごちのよいクラスにするためのアンケート」のついて、138名のデータを7月および10月について分析した。表2は、7月と10月の承認得点と被侵害得点の平均得点を求めたものである。全国の値は河村による全国平均を示したものである。

表2. Q-Uテストにおける承認得点と被侵害得点の平均値

	7月	10月	全国
承認得点	34.6	33.7	32.5
被侵害得点	18	18.2	22.5

本調査の結果、承認得点と被侵害得点の平均得点は、河村がおこなった中学生に対する全国平均と比較すると、よりプラス方向（交点が右上がり状態）を示しており、よい状況を示した。しかし、7月と10月の間では平均得点に差はみられなかった。

次に、2年生のプロット分布状況をみるために、学年平均得点による交点を求め、その座標上のプロット分布を確認した(表3)。7月、10月とも4割以上の生徒が満足群に属していることが明らかになった。

表3. Q-Uテストにおける7月と10月のプロット分布の状況(人)

	満足群	侵害行為認知群	非承認群	不満足群
7月	61 (44.2)	11 (8.0)	24 (17.4)	42 (30.4)
10月	56 (40.6)	18 (13.0)	27 (19.6)	37 (26.8)

( )=%

河村の全国平均値からみた満足群におけるプロット分布に占める割合より(全国平均35.0%)、本調査の学年平均値による満足群のプロット分布の占める割合が高い(53.6%)比率を示した。このことから、この学年では全体として半数の生徒たちが学級に満足していると考えられよう。

では、次に7月と10月のソーシャルスキル得点について、各群を被験者間要因、実施月を被験者内要因とする2要因の分散分析をおこなった(p<.05)結果を図1に示した。

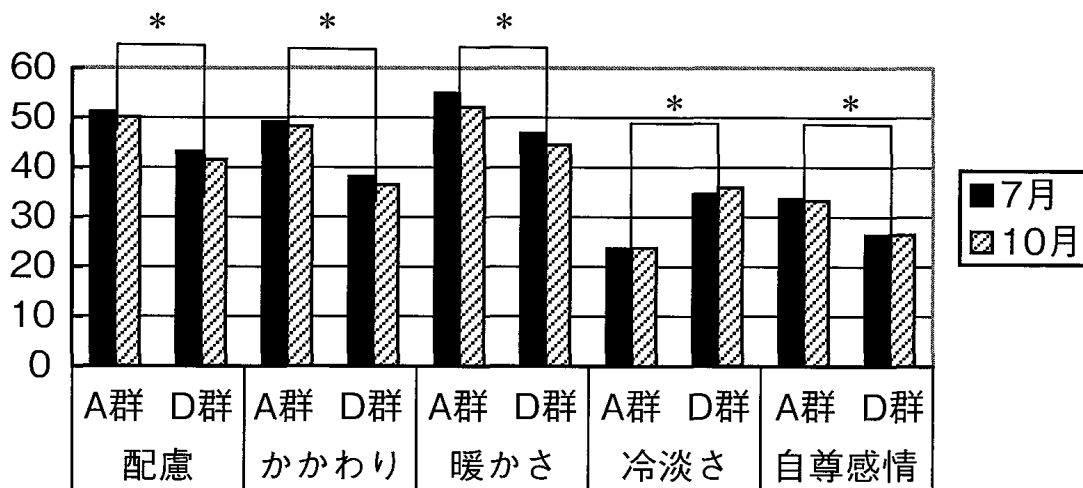


図1 A群とD群におけるソーシャルスキル尺度、情動的共感性尺度、自尊感情尺度の平均得点

7月と10月のソーシャルスキル尺度の「配慮」と「かかわり」の項目でA群とD群の間に有意な差がみられた ( $F_s(3,134)=17.08 \sim 28.15, p<.05$ )。すなわち、満足群 (A群) の方が配慮、かかわりの得点が高く、不満足群 (D群) では低かった。このことから、ソーシャルスキルの得点が高いほど学級への満足度を高めていると考えられよう。

また、情動的共感性尺度の「暖かさ」と「冷淡さ」の項目においてもA群とD群の間に有意差が見出された ( $F_s(3,134)=4.05 \sim 13.41, p<.05$ ) (図1)。

A群では暖かさが高く、冷淡さが低かった。それに対して、D群では、逆に冷淡さが高くなっていることが顕著にみられた。

自尊感情尺度では、7月と10月の間には差がみられなかったが、A群とD群の間では有意な差がみられた ( $F_s(3,134)=13.07, p<.05$ ) (図1)。その傾向は、A群に比べてD群の方が低く、ソーシャルスキルの配慮やかかわりの要因と同じような現象がみられた。このことから、友達とのかかわりのスキル得点が高いと自尊感情を高めることが推測された。

次に、各群に属する生徒の要因を明らかにするために、7月と10月のどちらにおいても、満足群、または不満足群に属している生徒を、常時満足群、常時不満足群として抽出した。それ以外の群 (例えば、7月に満足群で10月に不満足群に移行したグループなど) についても抽出し、その組み合わせから16群に分類した。これら、すべての群について分散分析をおこなった結果、有意な差がみられなかった。

そこで、常時満足群と常時不満足群の2群にしぼって各群を被験者間要因、実施月を被験者内要因とする2要因の分散分析をおこなった結果を示したものが図2である。



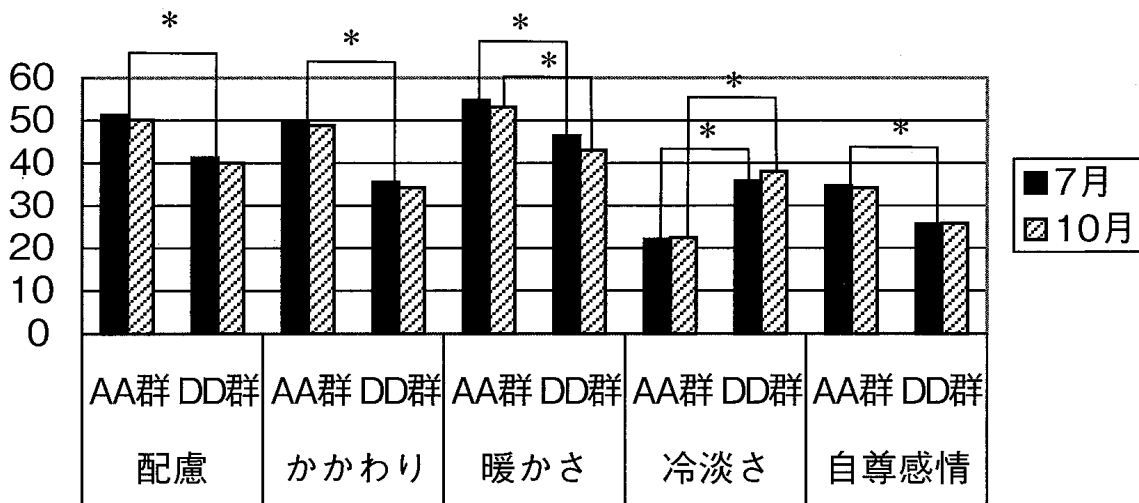


図2 AA群とDD群におけるソーシャルスキル尺度、情動的共感性尺度、自尊感情尺度の平均得点

常時満足群 (AA群) と常時不満足群 (DD群) のソーシャルスキル得点についての違いをみた。分散分析をおこなった結果、AA群とDD群の間には配慮、かかわりにおいて有意な差がみられた ( $F_s(3,86)=8.98 \sim 16.81, p<.05$ )。

また、情動的共感性尺度における「暖かさ」では、AA群がDD群よりも有意に高い得点を示した ( $F_s(3,86)=4.65, p<.05$ )。また、7月の方が高い暖かさの得点を示した。「冷淡さ」においては、DD群の方がAA群より有意に高かった ( $F_s(3,86)=10.53, p<.05$ )。また、その傾向は10月になるほど冷淡さの得点が高くなることを示した。

自尊感情の得点については、AA群はDD群に比べて得点が有意に高かった ( $F_s(3,86)=6.64, p<.05$ )。このことは、前述したようにソーシャルスキル得点が自尊感情に影響を与えていると考えられよう。

また、Q-Uテストの「やる気のあるクラスをつくるためのアンケート」において、友達における尺度では、AA群がDD群よりも有意に高い得点を示し ( $F_s(3,86)=12.36, p<.05$ ) (図3)、学級に満足している生徒は友達関係も良いことが明らかになった。同じように、学級における尺度においても、AA群がDD群よりも有意に高い得点を示した ( $F_s(3,86)=15.34, p<.05$ )。

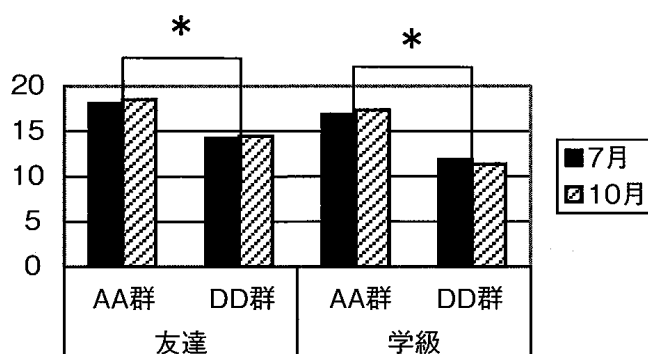


図3 友達および学級の項目におけるAA群とDD群の比較による分散分析の結果

### 考 察

今回の中学生を対象とした調査では、学級集団の中で満足しているか不満足であるかのどちらに属するかは、他者に対する「思いやり」や「配慮する」といったソーシャルスキルの要因が重要な働きをしていることが判った。とくに、他者に対する「かかわり」のスキルが十分に形成されていると、学級集団の中での友達関係は良い方向に促進されるといった友達同士の心理的な力動関係に強い影響を与えることがわかった。逆に、他者にかかわるといったスキルが十分に形成できていないと、学級の集団内で、友だちづくりが十分にできないことから、結果として自分自身の居場所を失うことにつながっている。すなわち、学級はおもしろくない空間であり、落ち着けない場所になるので、その場所に対して不満の気持ちを抱くようになり、不満足群に属させる結果となることが明らかになった。

このような、友達関係の形成に大きな影響を与えるソーシャルスキルの背景には、情動的共感性が強く影響を与えていることも示された。今回の調査は、中学2年生の二学期中旬という時期に実施した。この頃になると、学校生活の環境や友達、先生などとも十分に慣れ、各生徒はのびのびと自己を表現しながら、学校生活を過ごす時期と考えられる。しかし、今回の調査によると、情動的共感性の「暖かさ」においては、減少傾向がみられ、他者との関係にマイナスの要因として働くことが明らかになった。しかし、そのよう

な傾向とは逆に、「冷淡さ」の感情は高くなっている。これらは、思春期といった発達段階にみられる一つの特徴とみることができるかもしれない。しかし、この時期に友達との関係において、かかわりのスキルが減少していることが重要な点であると考えられる。このことは結果として、学級集団内で他者との関係をうまく保つことができず、学級集団に対しての満足度を減少させることにつながっていると見ることができる。この点については、小野寺・河村（1999）の研究による中学生の自己開示度の高群は、学級生活満足度が有意に高いことを明らかにしている。すなわち、自己開示度の高群は、学級内で自分自身のことや思いを積極的に開示することができる。それにより級友や教師に自分の思いを受け止めてもらうことによって、学級集団内で自分自身が認められることにつながっている。逆に、自己開示度が低い群では、学級内で自分自身のことや思いを開示できないため、学級内での存在感も薄くなり、そのことが周囲への阻害や侵害の認知が高まる傾向にはたらくと推測される。このように、学級内で特定の友達に気持ちを開示できることは、友達関係を形成する重要な要因になっていると考えられ、さらには、情動的共感性と連動しており、結果として、自尊感情にまで大きな影響を与えていると考えられる。したがって、他者とのかかわり行動の減少が、学級内に少しずつ拡大していくと、学級に満足している生徒にまで影響を与え、友達関係が学級の生徒間でうまく保つことができなくなり、次第に友達同士のつながりの低下となり、グループの崩壊、さらには学級集団の崩壊といった学級全体の状況を悪くさせていく図式が考えられる。

学級状態が悪くなると、学級に不適応を示す生徒が次第に増加することになる。そのことは、学校不適応経験群の自尊感情が普通登校群に比べて、有意に低い傾向を粕谷・河村（1999）は見出している。すなわち、自尊感情が低くなっていくことは、本人に深刻な学校不適応行動を生起させる要因になっている。また、社会的スキルに関しても低下させ、集団内で人とのかかわりをうまくとることができない。そのことが、対人への積極的な行動を抑制し、周りからはたらきかけに対しても、マイナスに受け取りやすい感情

を生み出し、不適応感をつのらせていく原因となっていることが示唆されるだろう。

このようなことから、学級全体の自尊感情のスキルを低くしないような防止策として、いろいろな対策が考えられるようになった。とくに、最近よく用いられるのが、構成的グループエンカウンターである。國分（2000）によれば、集団の中で、自分を活かしていく能力を育成する手段として用いるならば、ソーシャルスキルの低下や自尊感情の低下を防ぐための支援として、大変有効であることを指摘している。また、学級集団内で、アサーション・トレーニング（平木,1993）や、話しの聞き方（能動的な聞き方）、話し方（わたしメッセージ）を用いると効果的であると考えられ、学校でも実践されるようになってきている。

今回は、中学2年生という思春期の真中にある生徒を対象に本研究をおこなった。このような時期は、対人関係に複雑な要因が関係する時期でもある。とくに最近では、他者とのかかわり方をどのようにして育てるかが、学級支援のあり方として強く求められ、学級経営や集団づくりの大きな課題になってきている。その点についても今後検討が必要であろう。さらに、中学1年生から3年生までの学年間の比較の中で、どのような変化がみられるのかを発達の特徴と関係づけて、さらに検討していく必要があることも考えられた。

## 引用文献

- 平木典子 1993 アサーション・トレーニングーさわやかな「自己表現」のために 日本・精神技術研究所
- 堀 洋道 2001 心理測定尺度集Ⅱ サイエンス社
- 石隈利紀 1999 学校心理学 誠信書房
- 粕谷貴志・河村茂雄 1999 学校不適応における社会的スキルおよび自尊感情の検討 カウンセリング学会第32回大会発表論文集, 251-252.
- 河村茂雄 1999 生徒の援助ニーズを把握するための尺度の開発（1）-

- 学校生活満足度尺度（中学生用）の作成— カウンセリング研究, 32, 274-282.
- 河村茂雄 1999 生徒の援助ニーズを把握するための尺度の開発（2）— スクール・モラル尺度（中学生用）の作成— カウンセリング研究, 32, 283-291.
- 河村茂雄 2000 学級生活で必要とされるソーシャル・スキル測定尺度の開発— カウンセリング学会第33回大会発表論文集, 290-291.
- 河村茂雄 2001 グループ体験によるタイプ別学級育成プログラム 中学校編 図書文化
- 河村茂雄 2002 楽しい学校生活を送るためのアンケート実施・解釈ハンドブック 図書文化
- 文部科学省 2006 生徒指導上の諸問題の現状について（概要）
- 向井知恵子・河村茂雄 1999 学級生活満足度を活用した教師の関わり— カウンセリング学会第32回大会発表論文集, 259-260.
- 小野寺正己・河村茂雄 1999 中学生の学級満足度と自己開示との関係の考察— カウンセリング学会第32回大会発表論文集, 245-246.
- 小野寺正己・河村茂雄 2000 中学生の自己開示と学級満足度との関連性— カウンセリング学会第33回大会発表論文集, 296-297.
- 佐藤謙二・河村茂雄 2000 中学生の登校回避感情の実態に関する調査研究— カウンセリング学会第33回大会発表論文集, 292-293.
- トマス・ゴードン（著） 近藤千恵（訳） 2002 ゴードン博士の人間関係をよくする本 大和書房